

何をしてほしいのか

奨励	片岡 輝美 [かたおか・てるみ]
奨励者紹介	会津放射能情報センター代表

一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

(マルコによる福音書 10章46—52節)

原発から百キロの地・会津若松

ただ今、ご紹介いただきました片岡輝美です。東日本大震災直後から皆さまのお祈り、お支えをいただきましたこと、心から感謝申しあげます。本日は福島原発事故の向こうに見えることをお伝えし、事故後、主が私たちに何を求めているのか、私が実感していることをお話しできればと思います。

福島県は関東の胃袋を支えていると言われるほど実り豊かな県です。さらに、電力でも関東を支えていました。原発事故が起きた東京電力福島第一原子力発電所で作られた電力は全て関東に送られ、私たち福島県民は1ワットも使っていませんでした。私が住んでいる会津若松市は同発電所から西に100キロの地にあります。100キロは大変微妙な距離です。ある人にとっては、原発事故は距離的にも気持ちの上でも遠く、もともと影響はない。しかし、風評被害で苦勞した。または、事故は既に終わり、これからは復興だ、と思う人もいれば、まだまだ心配、不安に思う人、そして、それを声に出すことが、ますますできなく、ひとり苦しむ人がいる。そのような地域です。

私たちの人生が変わった

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が起こりました。この時から多くの人びとの人生が変わってしまいました。そして、ほどなく福島原発ではコントロールが効かない事態が始まっていくのです。放射性物質は、決して日本政府が予想したような半円を描いて被害を及ぼしたわけではありません。風に乗って舞い上がり雨風によってその土地に沈着していききました。大地・山々・河川・田畑・町、そして人びとを汚染しました。さらに海にも汚染が拡がりました。安倍首相が言うアンダーコントロールは、とても信じられません。

日本政府や福島県はなんとかして事故の過小評価をしようとしています。事故直後から今に至るまで、その姿勢は変わっていません。福島県内各地には、空間放射能を測定する「モニタリングポスト」が建てられています。モニタリングポストには数値が出ますが、私たちはこの数値を信用しません。なぜなら、矢ヶ崎馬場琉球大学名誉教授がご自身の測定器で測ったところ、30%前後低い数値がこのポストに表示されるということが分かったからです。

一昨日現在、震災直接死は1603人、関連死は1727人。この関連死(移動中避難先で病死や自死)した県民は原発事故がなければ生命を落とす必要がなかったのです。さらに関連死を認めてもらいたい遺族は3万人にも上ると言われています。直ぐには認可しない福島県からは事故の過小評価の意図が感じられます。

誰のための甲状腺検査？

2011年秋より、事故のとき18歳以下であった約37万人に甲状腺検査が始まりました。当初の目的は「親の不安を解消するため」でした。しかし、事故直後から安心安全キャンペーンを繰り広げてきた政府寄りの立場をとる学者や医者たちに、信頼を寄せることはできません。3年掛けて検査が終わりました。37万人全員が検査できたわけではありません。避難中や18歳以下なのに高校生は受けられない、受けたくないという7万人が未検査だということも分かりました。

5月19日、県民健康調査検討委員会から一応の全県検査の結果が出されました。小児甲状腺ガン確定者は50名、強い疑いは38名です。小児甲状腺ガン発症は事故前100万人に1、2名と言われていたから、多発していると予想されるのですが、県は福島原発事故との関連は考えにくいとしています。理由の一つは高性能機器で検査したスクリーニング効果で、見つからなくてもよくなったガンが前倒して見つかったということ。もう一つはチェルノブイリ事故後には幼い子どもたちに発症が見られたが、福島県の場合は10代を中心に発症している。この違いが彼らの理由です。

おとなしいガンであるというのに、なぜ多くの子もたちが手術されるのでしょうか。過剰診療なので、との検討委員会内での問いに、福島県立医科大学の鈴木真一教授は「実はリンパ節転移が多数見つかったので、甲状腺を切除している」と先週証言しました。私たちはおとなしいガンだから転移はないと説明を受けていました。しかし、そうではなかった。また、チェルノブイリ事故後、小学生以上の子どもたちを親から引き離し、強制的に避難させました。未就学児は親と汚染地に留まった。だから、幼い子どもたちに発症があった。しかし、福島県では親たちは幼い子どもを連れて避難。ですが、年齢の高い子どもたちは友人を裏切るような避難は拒み、県内に留まり、マスクもしない通常の生活、体育や部活動をしたのです。であれば、10代の発症の説明がつくと私は考えています。

私たちは健康診断を受ければ、検査結果の通知を受けます。それは私の情報だからです。しかし、甲状腺検査の場合はそうではありません。検査に親は入ることは拒まれることが多いのです。立ち会っても検査技師と話すことはできません。説明も受けられません。後日検査結果が郵送されますが、大きく区分した結果だけで詳細は分かりません。詳細を知るためには、個人情報開示の請求をしなくてはなりません。そして、郵送されたカルテは一部不開示です。検査担当者の氏名は消されています。将来、誤診があったときに訴えることもできないのです。一方、県は誤診による裁判に備え10億円の保険を医師会に掛けました。

私たちは「先が見えない不安」のなかに置かれたままです。原子炉から使用済み核燃料棒の取り出し、汚染水の流出、増え続ける汚染土、故郷に帰れるのか、故郷が中間貯蔵施設になってしまいかも。そしてそれは「金で解決できる」と石原環境大臣が発言する。子どもの健康、避難による家族の分断など、抱えきれない問題、何一つ解決していない問題を抱えこまされているのに、原発再稼働や海外輸出、そして華やかな東京五輪で覆い隠そうとする日本政府。誰のための何のための復興であるのか、大きな疑問不信感をもたざるを得ません。

「真実を知る」ということ

「先が見えない不安」を感じているのは、福島県民だけではないのです。今日お集まりの皆さまも、あの日から、またはそれ以前から原発や放射能に不安を感じているのなら、立派な被害者・当事者と言えるのです。

なぜ、先が見えない不安を感じているのでしょうか。それは「真実が知らされていない」からです。権力者や利益を得る者たちの不誠実さが怒りと不安を生み出しているのです。会津放射能情報センターのプログラムの一つに「子ども健康相談会」があります。不安を抱えたお母さんたちに山崎知行医師が寄り添います。ゆっくり気持ちを聞いた後、同医師は「心配すべきことと心配しなくてもよいこと」を伝え、心配すべきことに対して今何が出来るかをアドバイスします。原発事故以降「真実を知る」ことは恐ろしく悲しいことになってしまいました。しかし、真実を知らされたお母さんたちは、恐ろしさに立ちすくんでも、会津放射能情報センターの仲間や同医師が共にいることによって、歩み出すことができます。つまり「今、本当に重要なことは何なのか」を求め、判断できるようになるのです。

盲人バルティマイの生き方

本日の聖書に登場する盲人バルティマイも自分の将来に不安を抱いていたでしょう。そして、人びとから見捨てられ、底知れぬ絶望感を日々味わっていた人物です。障がいと物乞い、社会のなかで最も弱い立場、しかし、誰も助けてくれない。彼の存在は無きに等しいのでした。その彼が、ある日突然イエスに出会います。この人なら自分に気がついてくれるかもしれない。彼はこれまでに出たこともないような大声で叫び続けます。あまりのうろささに人びとは静止したほどです。しかし彼は叫び続けた。イエスはその彼の声を耳にし、招きました。彼は上着を脱ぎ捨て喜び勇んでイエスの足元に駆け寄ります。上着を脱ぎ捨てるとは今までの自分を捨てるということでしょうか。このときに彼は、イエスによって新たな生き方が与えられると確信していたのかもしれませんが。

イエスは問います。「何をしてほしいのか」。バルティマイは即座に答えます。「目が見えるようになりたいのです」。あなたは自分の願いを聞いてくれる存在に出会ったとき、何を願いますか。あれもこれもといういろいろあって、どれにすべきか分からないかもしれませんが。しかし、バルティマイはすでに決まっていた。「目が見えるようになりたい」。これは彼の願いが、生き方がぶれていなかったことを意味しています。人びとに無視され蔑まれようと、彼の心にはすでに生き方、つまり希望が定まっていたのです。

問われている私の生き方

イエスの問い「何をしてほしいのか」は「あなたはどのように生きたいのか」と、具体的な生き方を求めておられます。主は私たちに具体的な生き方を問われます。この混沌とした社会、原発事故以降、私はかなり絶望を感じています。復活の主が共にいてくださることを信じようとしても、絶望感に覆われてしまう自分を感じています。

しかし、主から与えられた生命を最後までしっかり生き抜くために、それが主の求めておられることだと信じ、私は「命(ぬち)どう宝(たから)」(沖縄の方言で「命こそ宝」)の社会を作りだすことに連なりたいと願っています。

「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」。私たち一人ひとりの生き方を主は良しとし、励まし共に歩んでくださることを約束してください。
かなり困難な時代です。しかし、私はひとりではない。主が共におられる。「命どう宝」を求める人びとは、今日も全国各地で、世界の苦難の地域で、声を上げ続けているのです。

2014年6月18日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録